

### (1) 歴史的・文化的地域資源の現状

歴史や文化というものはどの地域にも存在し、いわばどの地域もあり得る資源である。しかし、時代の変化によって、古い建物が取り壊されたり、最新の建物へ改築されたり、時代に沿って新しいものへ地域が変貌していく。特に、都市部では大型ショッピングモールやオフィスビルなど近代的な建物の建設が進められ、歴史的・文化的景観という地域資源が失われている。その一方で、埼玉県川越市の江戸時代から引き継がれている蔵づくりによる町並みや長野県小布施町の葛飾北斎・小布施栗を中心とした歴史的名産・人物をもとにしたまちづくりなど、歴史や文化に基づく地域資源を地域の発展につなげるまちづくりも広まりつつある。本章では、歴史的資源による地域の発展の事例を踏まえ、地域が時代ともに変わっていく中でいかに歴史的な地域資源を生かしていくか考察していく。

### (2) 歴史を活かした川越市のまちづくり

川越市は、時の鐘や蔵の町並みなど文化・歴史を生かした観光でよく知られ、年間 603 万人もの観光客が各地域から訪れている。川越市の蔵づくりの町並みは明治時代から続くものであり、当初は 1893 年の大火による防災対策から始まったものであった。火災後、当時の川越市の商人たちはレンガや石積みなど近代的な技法による改築を進めるのではなく、伝統的な工法である蔵づくりによって新店舗を建てていき、蔵づくりの町並みを形成していった。また、川越市の蔵づくりには、通りに面した店舗を蔵づくりにすることによって、周辺の建物からの類火を防ぐといった当時の知恵も取り入れられているのである<sup>1)</sup>。

しかし、1960 年代以降、蔵づくりの町並みの形成されている地域の旧市街地の衰退化し、蔵の改築や取り壊しが進められた。このような危機的状況から、「川越蔵の会」という市民団体が設立され、川越市民と行政機関と川越市外の支援者が一体となり、蔵を生かした商店街の活性化や蔵づくりの景観の保存に努めた。その結果、1999 年 12 月には日本の「重要伝統的建造物群保存地区」に定められ、現代にもその歴史的景観が受け継がれている。今でも歴史的建造物の保存活動や市民への啓蒙活動など、歴史的資源川越蔵の会を中心に行われている。さらには、川越市蔵づくりの資料館も設けられ、外部から多くの観光客を呼び寄せている<sup>2)</sup>。

### (3) 伝統文化を受け継いだ小布施のまちづくり

小布施町は、千曲川や雁田山に囲まれた自然豊かな農村地帯であり、人口も 1.2 万人程度の小さな町である。しかし、小布施町には年間 100 万人以上の観光客を集め、長野県有数の観光スポットとなっている。「栗と北斎と花の町」として小布施町にある伝統を生かし、ここ数十年で急激に発展してきた。

小布施の栗は約 600 年もの歴史を持つ小布施の名産であり、江戸時代から栗菓子として

も多くの人を食べられていた。現在でも栗ようかんや栗最中などの小布施の栗菓子は、観光客のお土産の定番となっている。さらに、2010年からは「おぶせくりちゃん」と「おぶせまるんちゃん」という栗をモチーフした小布施のゆるキャラも登場した。栗という名産が形ながらも、長い歴史を持って地域の人に身近なものとなっている<sup>3</sup>。

また、小布施町は幕末の浮世絵師として名が高い葛飾北斎が晩年を過ごした地域であり、北斎の芸術が数多く小布施に残っていた。文化財の保護として北斎の芸術を収蔵し、北斎館が開設したことにより、観光客は徐々に増加にし、開館初年度（1976年）の5万人から2001年には34万人にも達した<sup>4</sup>。北斎館が小布施町の観光業を支える文化所蔵施設であることは言うまでもない。さらに、北斎館の開設には当時の宅地開発で増加していた新住民と地域に長年住んでいる旧住民が共有する文化のシンボルにする目的もあり、町民の意識を一つにすることに寄与した。

#### (4) 歴史と文化の地域資源としての可能性

川越市と小布施の事例を見て、地域資源としての歴史・文化に関して主に2つのことが言えるだろう。まず一つは、歴史や伝統文化といった地域資源は地域の独創性を深めることである。各地域が持つ歴史や文化はそれぞれ異なり、一つとして同じものはない。そのため、地域の歴史や伝統文化を掘り下げることが地域のオリジナリティを形成し、地域としての存在感強くなるのではないだろうか。実際に小布施町の例では、北斎館や栗菓子などができたことによって他の地域からの観光客も増加し、小布施町の歴史や文化に対する需要が拡大している。

もう一点は、歴史や文化は地域アイデンティティの形成の基盤になることである。地域の歴史や文化によるまちづくりは地域の独自性を生み出すと同時に、地域住民としての意識も芽生えさせる。地域アイデンティティによってその地域に住むもの同士、共通点が生まれ、地域住民の連携の強化にもつながるのだ。川越市や小布施町の例では、蔵や北斎館などの町のシンボルが生まれたことによって、地域住民のつながりを強め、地域住民同士の協力が地域の発展へ生かされていった。

#### (5) 歴史と文化の地域資源の課題

地域の歴史や伝統文化を地域資源として生かされるには、その歴史や伝統文化が今を生きている現地の人々の生活にいか浸透していくかということである。川越市の例も小布施町の例も現代の地域の住民の人々が中心となり、地域住民の意思によってその地域の歴史的または文化的財産が保持されてきた。特に川越市の例を見れば、川越市蔵の会を中心とした地域住民の協力なくしては、蔵づくりの町並みが維持されていなかったかもしれない。ただ地域の歴史的・文化的財産を残すことに意味があるのではなく、どのようにしたら歴史的・文化的財産が現代の町に適合できるかを地域の住民が主体となって考え、時代変化に合わせて保持するための工夫が必要なのである。

さらに言えば、地域の歴史や文化が現地の住民に受け入れられなければ、歴史的・文化的な地域資源を受け継がれていかない。川越市では資料館の建設や啓蒙活動によって、後世に川越の歴史や文化を伝え継がれている。また、小布施町ではこの町の歴史ある名産品である栗がゆるキャラという現代を生きる人々にも身近に感じられる形にも変化している。さらに、川越市でも小布施町でも共通して言えることは、町の景観を整備したり、文化保護施設が建設されたりすることで、町の人々の日常生活の中で歴史や文化を実感できるものとなっていることである。時を経て町が変わっていく中で、地域の住民が受け継がれてきた歴史や伝統文化にいかなる価値を見出すか地域資源として生かされるための最大の課題であろう。

---

1 川越市蔵づくり資料館 ホームページ (2014/01/13 現在)

<http://www.kawagoe.com/kzs/>

2 川越蔵の会 ホームページ (2014/01/13 現在)

<http://www.kuranokai.org/home.html>

3 小布施町 ホームページ (2014/01/13 現在)

<http://www.town.obuse.nagano.jp>

4 戸所隆 (2003) 「時代の変化と地域資源を活かした観光都市政策」『地域政策研究』高崎経済大学地域政策学会 第5巻 第3号 pp.15